

研究問題討論会を行います。

原子力のこれからをどうするか： その1

日時：4月11日(水) 18:30から

場所：原子力科学研究所構内、原研労組事務所

参加資格など：

組合員、非組合員どなたでも参加できます。

討論課題：

「原子力のこれからをどうしていくべきか」を
数回にわたって議論していきたい。

[行くか、やめるか、やり直すか]

書記長 花島 進

大災厄をもたらした地震から一年たちました。福島支援など当面やらなければならぬこともあります。しかし、わが国唯一の総合原子力研究開発機関に勤めるものとして、当面の対応だけでなく、これからどうすべきかを真摯に考えなければなりません。

今回の事故は、単にたまたま運の悪いことが起きたということではなく、わが国の原子力の弱さのあらわれです。なぜこのように脆弱なものを作ってしまったのか、できてしまったのかをよく考えなければなりません。

いま、新しい規制体制を作る議論の中で、原子力規制機関を環境庁の外局にするか、あるいはより独立性の高い行政委員会にするかなどの議論があります。また規制にかかわる人材を、どのように得るのか、あるいは養成するのかといった難問もあります。

しかし最も大切なことは、今回の事故をどのように受け止め、反省し、その反省を将来に生かすことです。その反省なしで、組織図を描いても何もよいことはありません。今回の事故に責任がある人・組織は、現時点では、ほとんど責任をとってこないし、とらされてもいません。しかし、彼らは明らかに「失敗した」のであり、それは津波の高さや、東電の事故対処の問題ではありません。まさにどのような思想で、どのように想定をつくり、どのように備えるかというシステムの根本での失敗です。

国民の原発への懸念は高まり、まもなくわが国の全ての原子力発電所が止まることになるでしょう。われわれも含めた原子力関係者、原子力業界、学会な

どが国民から信頼を得るようになることは必要ですが、それは、単に信じてもらうことではなく、信頼にたる人・組織になり、信頼にたる技術・システムをつくらなければならないということです。

世間から「原子力村」とか「原子力安全神話」と批判される部分については、わが労組は以前より批判してきたものであり、先輩たちには、その批判的精神の故に差別され、あるいは不利益を受けてきた人も多くいました。今、ある意味でそのような差別・圧迫は今回の情けない事態を招くプロセスのひとつであったことは明らかです。我々自身の力の至らなさを反省しつつも、思っていることをどんどん言っていきたいと思います。

これまでの地位ある指導者たちは、将来へのまともな展望を持っていないでしょうから、我々が考える必要があります。

昨年11月に行った労組の討論会では、大学の教育の時点から、批判的思考のトレーニングがされていないことが指摘されていました。問題の根は深く、病は重いのです。じっくり考えて行きましょう。

3月14日、春闘要求書を提出しました。

国家公務員では平均7.8%の給与削減が行われることになりました。国家公務員ではない我々にも、同様の措置をせよとの要請があります。どうするかが焦点になります。 労組の要求は賃上げですが、同様の措置があれば、賃上げどころか、大幅な削減です。多くの職員にとっては生活設計が狂ってしまいます。こんな無茶は許されません。独立行政法人としての論理がたちません。

我々の仲間の法人のいくつかでは、すでに削減提案が示されているところがあります。金融関係では、一律7.8%削減の提案があり、学生支援機構でも、削減提案がなされています。理化学研究所は、2月29日早々に、協定破棄通告を組合にしました。

現時点で、原子力機構側からの具体的提案はありませんが、労組執行部はストライキも含めて戦うつもりでいます。組合員の皆さんも、心の準備をお願いします。

非組合員の方々へ： このような時、組合に入らず一人でいれば、ぶつぶつ文句を言うことしかできません。労働条件改悪阻止の力にもなりません。

原研労組に入って、ともに進みましょう。

4月4日、

新入職員に対して、労組の説明会を行います。今年度は101人の方が来ます。皆さんの職場に配属されましたら、ぜひ勧誘してください。